

# 令和7年度病害虫発生予報第10号

令和8年1月30日  
山梨県病害虫防除所

## 今月の天気予報

1月29日気象庁発表、1か月予報による関東甲信地方の向こう1か月（予報期間1月31日～2月28日）の天気は次のとおりです。

向こう1か月の気温はほぼ平年並の見込みです。低気圧の影響を受けにくいため、向こう1か月の降水量は少なく、日照時間は多いでしょう。

## I 各作物の病害虫発生予報

### 【野菜】

作物	病害虫名	発生時期	発生量	予報の根拠（○）及び防除上注意すべき事項（□）
半促成トマト	葉かび病	平年並	平年並	<p>○1月下旬現在、巡回ほ場における発生は平年並である。</p> <p>○向こう1か月の気温はほぼ平年並、降水量は少ない見込みである。</p> <p>□施設内が多湿にならないように過度な灌水は控え、換気等による施設内の湿度低下に努める。</p> <p>□多発すると防除が困難なため、早期発見に努め、初期防除を徹底する。</p> <p>□発病した葉は伝染源となるため、除去して施設外に持ち出し処分する。</p> <p>□抵抗性品種でも発病する菌が存在するため、注意して発病の有無を確認する。</p> <p>□すすかび病と似ており、判断が難しい場合には、防除薬剤は両方に登録のある薬剤を使用する。</p> <p>□県内で効果の低下がみられる薬剤もあるため、防除薬剤は総合農業技術センター令和4年度成果情報「トマト葉かび病の抵抗性品種に感染する系統の発生および有効薬剤」 (<a href="https://www.pref.yamanashi.jp/documents/108010/r4_10_hakabi.pdf">https://www.pref.yamanashi.jp/documents/108010/r4_10_hakabi.pdf</a>) を参考に防除する。</p>
	すすかび病	並 (例年比)	並 (例年比)	<p>○1月下旬現在、巡回ほ場における発生は例年並である。</p> <p>○向こう1か月の気温はほぼ平年並、降水量は少ない見込みである。</p> <p>□施設内が多湿にならないように過度な灌水は控え、換気等による施設内の湿度低下に努める。</p> <p>□多発すると防除が困難なため、早期発見に努め、初期防除を徹底する。</p> <p>□発病した葉は伝染源となるため、除去して施設外に持ち出し処分する。</p> <p>□葉かび病と似しており、判断が難しい場合には、防除薬剤は両方に登録のある薬剤を使用する。</p>

## 【野菜】

作物	病害虫名	発生時期	発生量	予報の根拠（○）及び防除上注意すべき事項（□）
半促成トマト	<u>コナジラミ類</u> (タバココナジラミ・オンシツコナジラミ等)	平年並	平年並	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 1月下旬現在、黄色粘着トラップ設置ほ場（中央市）における誘殺量は平年並である。</li> <li>○ 向こう 1か月の気温はほぼ平年並の見込みである。</li> <li>□ 施設内での越冬を防ぐため、抑制栽培の残渣処理や施設内の除草を徹底し、積極的に施設を開放して寒気を入れる。</li> <li>□ 育苗期後半または定植時には薬剤処理を徹底する。</li> <li>□ 定植前には、ウイルス病を媒介するコナジラミ類の侵入を防ぐため、施設開口部（天窓、側窓、換気扇口等）はすべて0.4mm目以下の防虫ネットを展張する。出入り口は二重カーテンにするなどして侵入を防止するとともに、ネットの隙間や切れ等がないか注意して確認し、不備があった場合は直ちに補修する。</li> <li>□ 定植後には低い位置にも黄色粘着板を設置し、コナジラミ類の誘殺状況を確認し、発生初期の防除を徹底する。</li> <li>□ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。</li> <li>□ 施設内外の雑草は、増殖源となるため除草を徹底する。</li> <li>□ ウイルス病の発病株は見つけ次第抜き取り、ビニール袋に入れてコナジラミ類を死滅させ、枯らしてから施設外に持ち出し適切に処分する。</li> </ul>
	アザミウマ類	—	平年並	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 1月下旬現在、巡回ほ場における発生は平年並である。</li> <li>○ 向こう 1か月の気温はほぼ平年並の見込みである。</li> <li>□ 多発すると防除が困難になるため、発生初期の防除を徹底する。</li> <li>□ ほ場周辺の雑草は発生源となるので、除草を徹底する。</li> </ul>
イチゴ	<u>うどんこ病</u>	—	平年並	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 1月下旬現在、巡回調査ほ場（甲府市、甲斐市、山梨市）における発生量は平年並である。</li> <li>○ 向こう 1か月の気温はほぼ平年並、降水量は少ない見込みである。</li> <li>□ 早期発見に努め、発病した茎葉・果実は除去して施設外に持ち出し、処分する。</li> <li>□ 多発すると防除が難しくなるため、予防防除に努める。</li> <li>□ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、同一系統薬剤の連用を避けローテーション散布を行う。</li> </ul>
	<u>ハダニ類</u>	—	平年並	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 1月下旬現在、巡回調査ほ場（甲府市、甲斐市、山梨市）における発生量はやや多い。</li> <li>○ 向こう 1か月の気温は、ほぼ平年並の見込みである。</li> <li>□ 発生が多くなると防除が困難になるため、発生初期の防除を徹底する。</li> <li>□ 下葉の裏に多く寄生するため、生育に影響のない範囲で下葉を除去した後、薬液が葉裏にも十分かかるよう丁寧に散布する。</li> <li>□ 薬剤によってはミツバチへの影響があるので、薬剤の選択には注意する。</li> <li>□ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、同一系統薬剤の連用を避けローテーション散布を行う。</li> </ul>

## 【野菜全般】

病害虫名	発生時期	発生量	予報の根拠（○）及び防除上注意すべき事項（□）
灰色かび病 (越冬、 <u>半促成トマト</u> ・ <u>半促成キュウリ</u> ・ <u>イチゴ</u> 等)	一	平年並	<ul style="list-style-type: none"> <li>○1月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。</li> <li>○向こう1か月の気温はほぼ平年並、降水量は少ない見込みである。</li> <li>□施設内が多湿にならないように、過度な灌水は控え、低温に注意しながら換気を行い、施設内を適度な湿度に保つ。</li> <li>□早期発見に努め、発病した茎葉、花、果実は除去して施設外に持ち出し、処分する。</li> <li>□前年多発したほ場では発生に注意し、予防散布に努める。</li> <li>□薬剤抵抗性の発達を防ぐため、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。</li> </ul>
うどんこ病 (半促成トマト・ <u>半促成キュウリ</u> 等)	平年並	平年並	<ul style="list-style-type: none"> <li>○1月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。</li> <li>○向こう1か月の気温はほぼ平年並、降水量は少ない見込みである。</li> <li>□早期発見に努め、発病した茎葉、花、果実は除去して施設外に持ち出し、処分する。</li> <li>□多発すると防除が難しくなるため、予防防除に努める。</li> <li>□薬剤抵抗性の発達を防ぐため、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。</li> </ul>

## II 各病害虫対策

### 【モモ・スモモ】

#### モモ縮葉病・スモモふくろみ病

休眠期防除は、天候の安定した時期に風のない日を選び、枝先から樹元まで丁寧に薬剤を散布する。散布後に降雨が多い場合は、追加散布を行う。

#### せん孔細菌病・黒斑病

枯れ枝等は、伝染源となるので剪定時に見つけ次第除去し、園外へ持ち出す。

### 【モモ・オウトウ】

#### カイガラムシ類

カイガラムシ類の発生が見られる園では、

- (1) ブラシ等でかき落とすとともに、寄生の多い枝は剪除する。
- (2) モモでは2月上旬までにスプレー油またはトモノールSのいずれか50倍を散布する。ウメシロカイガラムシが多い場合は、樹勢に注意しながら、30～40倍を用いてもよい。
- (3) オウトウでは、2月上旬までにスプレー油30倍を散布する。
- (4) スプレー油、トモノールSの散布にあたっては、散布終了まで常時攪拌し、二度がけはしない。また、ブドウ、ウメには薬害が発生するため、隣接園では使用しない。

### 【ブドウ】

#### 晚腐病

病原菌の越冬密度を下げるため、剪定時に伝染源となる巻きひげ、果梗の切り残しの除去を徹底し、古づる（越し枝、重なり枝等）の整理を行う。既に剪定が終了した園でも、結果母枝の誘引時に改めて見直す。

#### 黒とう病

病原菌の越冬密度を下げるため、剪定時に伝染源となる巻きひげや病斑の見られる枝の除去を徹底する。特に、昨年発生が見られた箇所には、発病枝が残っている事が多いのでよく確認する。

## 【カキ】

### 落葉病

病原菌は、主に落葉の中で越冬するため、伝染源となる落ち葉は園外に持ち出しか、土中に埋めるなどして、適切に処分する。

## 【半促成栽培におけるトマト黄化葉巻病・トマト黄化病の防除対策】

詳細については「トマト黄化葉巻病（半促成栽培版）」の防除対策  
<https://www.pref.yamanashi.jp/byogaichu/>を参考にする。

### 育苗・定植期

- (1) 育苗圃場や栽培圃場の開口部に0.4mm以下の防虫ネットを展張し、コナジラミ類(成虫)の侵入を防ぐ。なお、目合いの細かいネット使用の際は、施設内の温度上昇に注意する（施設内の高温が心配される場合は、天窓部分の防虫ネットを0.5~1.0mm程度の目合にしても、一定の侵入防止効果は期待できる。）。
- (2) 設置した防虫ネットは隙間や破れ等がないか注意して確認し、不備があった場合は直ちに補修する。
- (3) 栽培施設の出入口は二重構造にし、開放状態にならないようにする。
- (4) 病害虫の寄生が無い苗であることを確認する。
- (5) 育苗期及び定植時の薬剤処理は、初期防除として防除効果が高いため必ず実施する。

### 生育期

- (1) 施設内に黄色粘着板を設置し、コナジラミ類の発生状況を定期的に確認して、発生初期の防除を徹底する。
- (2) コナジラミ類成虫は成育初期～中期では、トマトの低い位置で寄生し、幼虫は葉裏に多いため、薬剤散布の際は低い位置から葉裏に十分薬液がかかるよう丁寧に行う。
- (3) 薬剤効果の低下が認められるタバココナジラミ（バイオタイプQ）が広く存在するため、薬剤選択に注意する。なお、同一系統薬剤の連用は、薬剤効果の低下につながるため、異なる系統の薬剤によるローテーション散布を実施する。
- (4) 発病株を発見したらすぐに抜き取り、直ちに防除を行う。
- (5) 抜き取った株や芽かきした茎葉は、ビニール袋に入れて枯死させてから持ち出す。
- (6) 施設内外の雑草や野良生えトマトはコナジラミ類の増殖源となるため、除去する。

## 【果樹全般】

チュウゴクアミガサハゴロモ

枝に産卵痕を見つけたら、発生密度低減のため切除し、地中深く埋めるか焼却するなど適切に処分する。

※参照 令和6年度病害虫発生予察特殊報第2号（チュウゴクアミガサハゴロモ）

<https://www.pref.yamanashi.jp/byogaichu/70568874362.html>

## 農薬は正しく使いましょう

(農薬の適正使用について :

[https://www.pref.yamanashi.jp/nougyo-gjt/kenkyu/nouyaku\\_shiyou.html](https://www.pref.yamanashi.jp/nougyo-gjt/kenkyu/nouyaku_shiyou.html) 参照)

### 連絡先

山梨県病害虫防除所（山梨県総合農業技術センター調査部）

TEL 0551-28-2941

Eメール byogaichu@pref.yamanashi.lg.jp

### インターネット

山梨県病害虫防除所ホームページ

予報対象作物を中心に「トラップ調査結果」「病害虫写真」等を掲載しています。

アドレス <https://www.pref.yamanashi.jp/byogaichu/>